

国際共同研究交通費補助 研究成果報告書

(適宜行追加可)

所属・職・氏名	経済学部 教授 原田哲史
共同研究者 所属・職・氏名	ドイツ・フランクフルト大学経済学部 上級教授 ベルトラム・シェフオールト
研究課題	経済学における経済学史研究の意味についての考察
共同研究 実施期間	招聘期間：2019年12月5日～2019年12月9日
共同研究 実施場所	本学「大学図書館ホール」（経済学史研究会第250回記念例会）、その他宿泊先「宝塚ホテル」（研究打合わせ）
1. 研究の成果（本共同研究によって得られた新たな知見、成果等を簡潔に記述してください。該当しない場合は「該当なし」と記載してください。）	
<p>(1) 学術的価値（本研究により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果）</p> <p>つねに関西学院大学で催されて節目の第250回めとなった、経済学史研究会記念例会でのシェフオールト氏の記念講演“The Significance of Economic Knowledge for Development in History”によって、経済学史における各国比較に関する新たな知見が得られた。それは、利子・暴利取得のレベルで異なる文化（宗教）圏の経済観・経済思想の比較という知見である。</p> <p>シェフオールト氏によれば、歴史的には、ヨーロッパでは、キリスト教文化圏では暴利はもちろんのこと利子の取得さえ長らく否定的に捉えられてきたが、その只中で、ユダヤ教徒は他教徒に対する利子取得について躊躇しなかったため、ユダヤ教徒がヨーロッパの金融界を牛耳ることになった。このことを各国比較にも応用して、歴史的に中国で（さらには日本でも）どの程度まで利子や暴利が認められてきたのか、また暴利に対する処罰がどのようであったかを解明することによって、世界的な規模での経済観・経済思想の比較が可能となる。</p>	
<p>(2) 相手国との交流（海外の研究者と学術交流することによって得られた効果）</p> <p>これまでドイツ（ヨーロッパ）と日本の経済学史上の学術交流は、近代的な経済社会の形成過程がいかに異なっており、その際の経済学はどうであったかという観点からの比較が中心であったが、上記の問題設定の提示によって、ヨーロッパとアジア——中国・日本——さらにはイスラム圏にもおよぶグローバルなレベルでの様々な経済学・経済思想の歴史を比較文化史的なものとして探求する足場を得ることができた。</p>	
<p>(3) 社会貢献（社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献）</p> <p>社会主義政権が崩壊したのち1990年代から今日、世界経済において文化的に相違する諸国民経済間の対立や均衡が、体制（資本主義・社会主義）の相違よりも重要となった。こうした状況において、経済学史研究もそうした諸関係の歴史的経過を視野に入れた認識を行うことが必要となっている。わが国は、小集団主義・おもてなし精神といった日本文化を多かれ少なかれ継承しているのであるが、それを前提にしつつ、国際社会でどのようにその利点を生かしながら難点を克服しつつ進化していくかは、大きな課題である。その展望を得るための基礎研究として、上記（1）（2）の視座からの経済学史研究を位置づけることができる。</p>	

(4) 若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取り組み、成果)

経済学史研究会第250回記念例会(シェフオールド氏が記念講演)には、20代~30代の定職取得以前・定職取得直後の若手研究者が全国から多数出席した。専修大学経済学部学部生(研究者志望)、京都大学大学院経済学研究科大学院生、京都大学ジュニアリサーチャー、九州産業大学経済学部専任講師、大阪国際大学専任講師ら(すべて過去の例会への参加者)がそれである。こうした若手たちは、それぞれの本研究会との関係においてこの記念例会の開催に協力するとともに、シェフオールド氏の講演から上記の新たな知見を共有することができた。例えば、同研究会の前事務局補佐で現大阪国際大学専任講師の若松直幸氏は、講演原稿の原文(英語)をあらかじめ日本語訳し、講演前日にシェフオールド氏との打ち合わせで不明点について説明してもらい、訳文を修正し、自らの認識と翻訳力を高めるとともに、当日出席者全員に配布して貢献した。

(5) 将来発展可能性(本研究を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

第250回記念例会を経てさらなる進化を目指している本経済学史研究会は、シェフオールド氏の比較文化的な経済学史のアプローチを得て、現代的な性格を有するものへと自らを彫琢し、研究内内容を全国に、さらには国際的にも発信していく可能性がある。

(6) その他(上記(1)~(5)以外に得られた成果があれば記述してください。)

例: 大学間協定の締結、他事業への展開、受賞、産業財産権の出願・取得等

例に挙げられているような「その他」の成果は、とくにない。

2. 研究発表(本共同研究の一環として発表(予定含む)したものについて記述してください。なお、印刷物がある場合は1部添付してください。)

例: 共著論文、口頭発表、出版、ポスター発表

シェフオールド氏の上記講演“The Significance of Economic Knowledge for Development in History”の原文と、若松直幸氏によるその日本語訳(上記(5)参照)とを添付する。両者とも当日出席者全員に配布されたが、後者は——原田のアドバイスを経たうえで——加筆修正したのち、本学経済学部の『経済学論究』に掲載する予定である。